

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中近世スペインにおける聖ヤコブ崇敬の連続性 :
民衆の「祈り」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2515

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



[博士論文審査の要旨]

本論文はキリストの使徒聖ヤコブ（スペイン語ではサンティアゴ）に対するスペインにおける崇敬およびキリスト教圏の三大巡礼の一つとなったサンティアゴ巡礼の、中世から近世にかけての趨勢を研究テーマとしている。これまでの定説では、聖ヤコブ崇敬はサンティアゴ巡礼とともに中世に最盛期を迎え、近世はその衰退期とされてきた。本論文執筆者はこの定説に疑問を呈し、新たな側面からこの聖人への崇敬および巡礼史の実像を捉えることを試みる。本論文の主張は、小氷期が巡礼路の変更を引き起こし、巡礼者がサラゴサを経由することになった結果、聖ヤコブと新たな崇敬対象として興隆したサラゴサの柱の聖母との習合が、前者の聖人としての権威をめぐる論争にもかかわらずサンティアゴ巡礼を強化したというものである。こうした主張を裏付けるため、中世のイベリア半島において聖ヤコブへの崇敬およびサンティアゴ巡礼が興隆した理由と、近世前半の崇敬低下および巡礼者の減少に関する問題を、気候学に基づく災害史の観点から論じる。

聖ヤコブを含めた聖人崇敬の底流として、神への執り成しを求める信者たちの祈願があることを示すとともに、近世における崇敬の低下の証左とされる聖ヤコブをめぐる論争およびサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼者の減少という事象を再検討し、それらが崇敬の低下という評価に直結しないものであることを、巡礼史に関する近年の研究やアナール派による気候研究をもとに手堅く論証している。その上で、スペインにおける聖ヤコブ崇敬と密接に結びついているサラゴサの柱の聖母との相補的な関係性が強化されたことによって、近世においても聖ヤコブ崇敬およびサンティアゴ巡礼は新たな意義とともに継続的に展開されていたことを、災害史との関連性などを傍証として主張する。巡礼史研究や気候研究における新たな知見に依拠しながらも、独自の視点でそれらを捉え、これまで論じられてこなかった中世から近世にかけての聖ヤコブ崇敬の側面を浮かび上がらせることに成功していると言える。以上の理由で、本審査委員会は本論文が学位請求論文として高い評価に値するものと判断する。

[論文審査結果]

本論文は、序章、第1章から第4章までの本論および終章からなる。本論文著者はまず序章において、近世スペインの聖ヤコブ崇敬およびサンティアゴ巡礼をめぐる問題点について整理する。中世の盛期に対して近世を衰退期としてきたこれまでの定説は巡礼者の減少という事象を根拠の一つとしているが、巡礼路の変化に着目した近年の研究はこれに疑問を投げかけている。こうした研究史を踏まえ、著者は巡礼路の変化が気候変動によってもたらされた可能性とともに、気候学を中心とした新たな知見が聖ヤコブ崇敬およびサンティアゴ巡礼を考察する視座として有効なものであることを主張する。同分野の研究に対するこうした着眼点に、本論文の特筆すべき独創性を認めることができる。

本論の第1章では、次章以降の論証の前提としてキリスト教における聖人崇敬の成立と、

同崇敬および聖遺物崇敬が一般信者と教会組織の要請に応える形で発展していった経緯が詳述される。キリスト教の聖人崇敬は古代ローマ帝国において殉教者を神の証人として見なすことから始まったとされ、ミラノ勅令後、殉教者以外の聖人を含めた形で拡大した。そうした歴史を素描した上で、著者は拡大の要因として聖人の有する神への執り成しの力（ウィルトゥス）、つまり神の恩寵を求める一般信者の祈願と、珍重された聖遺物を擁して多くの巡礼者を迎えようとする教会の意図があったことを、先行研究に基づき指摘する。さらにイベリア半島における聖遺物崇敬の状況にも付言しながら、聖人崇敬の黎明期の状況を概説するとともに、聖ヤコブ崇敬の変遷を論じる上で前提となる事項を提示する。

第2章では中世における聖ヤコブ崇敬の興隆が論じられる。サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼を成立させた聖ヤコブ崇敬の起源を整理した上で、その拡大に先立って「病気治癒」や「悪魔祓い」といった効験が求められていた理由を、同時代の気候状況に見出す。ここには聖ヤコブ崇敬に関する資料を気候研究の成果に基づいて読み解くという本論文の独自性の一端が示されている。またサンティアゴ巡礼が最盛期を迎えた時代、聖ヤコブは「病気治癒」よりもイスラム教徒との戦いや巡礼に際しての「危難回避」の効験をもたらす聖人として崇敬の対象となるが、この点に関しても、巡礼が活発化した時期が気候の安定した中世中期温暖期と重なることを挙げ、そのことが広域的な人の流れを可能にするとともに、移動に伴って生じる様々な問題が「危難回避」という効験を重要視させることになったと指摘する。

第3章では、まず中世末期から近世にかけての聖人崇敬の変化に言及する。変化の端緒として宗教改革に伴う批判や対抗宗教会議による制約を挙げ、結果としてこの時代の聖人崇敬に求められた効験が「病気治癒」と「天候回復」であることを示す。前者については猖獗を極めたペストに、後者については小氷期に伴う異常気象にその理由を求め、その上でこれらを近因あるいは遠因とする形で主張されてきた近世におけるサンティアゴ巡礼者の減少と、この時代を聖ヤコブ崇敬の衰退期とする評価の再検討を試みる。

近世における聖ヤコブ崇敬の低下を示す証左とされてきたのが、聖ヤコブの聖人としての權威をめぐって惹起された三つの論争である。このうち聖ヤコブ祈念課税とイベリア半島における聖ヤコブの布教活動をめぐる二つの論争は歴史的事実性の欠如を批判したものであり、もう一つは近世におけるスペインの守護聖人としての資格を問うものだが、聖ヤコブ祈念課税と守護聖人に関する論争については崇敬の低下を示すものではなく、当時の気候変動とそれに伴う災害に起因するものであることを、気候研究の成果などに立脚する形で詳細に論証している。残る聖ヤコブの布教活動をめぐる論争についても、首席大司教座をめぐって中世から続くトレドとサンティアゴ・デ・コンポステーラの権力闘争の一端に過ぎず、これらの論争を根拠とした崇敬の低下という評価に疑問を付す。近世が聖ヤコブ崇敬の衰退期であるとする捉え方に再考を迫る重要な指摘と言える。

以上の考察を踏まえ、第4章では近世における聖ヤコブ崇敬が同時代に興隆した柱の聖母崇敬と連動し、新たな崇敬の形態を獲得したとする主張が展開される。聖ヤコブによる

イベリア半島の布教に際して出現したとされる柱の聖母の伝承は、中世の聖ヤコブ伝承における聖母のイメージ像の一つとして13世紀頃に成立したとされる。柱の聖母崇敬の中心地であるサラゴサは、当初はサンティアゴ巡礼路の要所の一つであったが、17世紀における柱の聖母崇敬の興隆とともに一大巡礼地となる。この現象を聖ヤコブ崇敬から柱の聖母崇敬への移行とする従来の定説に対して、著者は両崇敬が競合的な関係のものではなく、むしろ相補的なものであったことを、柱の聖母崇敬と聖ヤコブ崇敬をそれぞれ擁護する意図で作成された当時の文献を精査しながら明らかにする。

さらに、序章においても言及された巡礼路の変化に関する先行研究を支持する形で、自説を補完する。まず第3章でも論じられた小氷期の結果、中世とは異なる行程を辿ることを強いられたサンティアゴ巡礼者が柱の聖母教会のあるサラゴサを訪れていた可能性に言及し、併せてその要因として聖ヤコブと柱の聖母の習合的な効験への期待があったとする見解を示す。傍証として当時の人的移動に関する資料や、両聖人の習合を示す図像等を挙げながら、習合の理由を近世の聖人崇敬において重視された「天候回復」と「病氣治癒」の効験に見出す。そして他の聖人以上に「天候回復」を期待することのできた柱の聖母と、伝統的にペストに対する加護など「病氣治癒」を託すことのできた聖ヤコブの習合は、近世の人々にとって最も望ましい効験を提供するものであり、それぞれの聖地を結ぶ巡礼路が特別な救済空間として機能していたと結論づける。

最後に、近世という時代の諸相に付言しながら、上記の論点およびその検討の結果を整理し、今後の課題についても言及して終章が閉じられている。

以上概観したように、本論文は冒頭で提起した問題に対して、通史的な観点からも検討を加えながら、主眼となる近世の聖人崇敬を論じる根拠を詳細に示し、結論を導くことに成功している。斬新な視点からの刺激的な考察がなされている一方で、資料の提示や文献の精査、先行研究の検証、訳語や用語の妥当性など改善すべき点はあるものの、本論文著者の論者としての視座には一貫性が認められ、また各論の随所においては示唆に富む見解が示されており、真摯に問題に取り組む姿勢も高く評価できる。従って、本学大学院博士論文として内容的にも、体裁としても申し分のないものであると判断できる。

[最終試験結果]

最終試験は2020年2月7日午後2時から、本学の三木記念会館で実施され、野村竜仁(主査)、モンセラット・サンス、成田瑞穂の3名の本学教員と、京都外国語大学の立岩礼子教授が審査に当たった。審査は公開でおこなわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後、各審査委員が論文に対する意見や感想を述べるとともにいくつか質問をして、申請者がそれに回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。聖ヤコブ崇敬に関する研究動向、宗教改革と聖人崇敬との関係、聖人崇敬における相互補完性、特定の地域間での巡礼活動の特性、巡礼の経済的要因や巡礼者の社会的身分、また参考文献や図表に関しても質問が出された。申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場からの質問の機会を設けて公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議をおこなった。各審査員がそれぞれの見解と評価を述べ合い、話し合った上で、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士(文学)の学位を授与するのに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。